

宋代軍事史研究と「東部ユーラシア」

伊 藤 一 馬

はじめに

近年の日本の宋代史研究において、「宋代中国」を時間的・空間的により広い視野のもとで位置づける必要性が提起されている¹。宋代史研究を取り巻くこのような学界動向のなかで、特に注目されるのが「東部ユーラシア（ユーラシア東方）²」という空間から「中国」を含むユーラシア大陸東方域の歴史展開を捉え直そうとする視座であろう。この「東部ユーラシア」という枠組みは、2000年代ごろより複数の研究者によって提起されてきた。最近では、「東部ユーラシア」論と一括りにされたり、「統一見解がない」と批判されることもあるが、そもそも「東部ユーラシア」は中央ユーラシア史・海域アジア史・日本史・中国史の研究者が、それぞれの研究の立場から提起したものであり、共通点も含まれてはいるものの本質的な相違も見られ、統一見解を見出すのは困難であり、その必要もないと筆者は考えている³。

さて、宋代史研究と「東部ユーラシア」の関係について言えば、かつて提起された、東ユーラシアという枠組みのもとで周辺勢力との関係を念頭に置きながら宋朝を捉え直す視点〔飯山ほか2009〕は、「東部ユーラシア」という枠組みとの親和性が極めて高いと思われる。実際に、古松崇志・廣瀬憲雄・山内晋次各氏が宋代、すなわち10～13世紀の「東部ユーラシア」を対象とする研究を発表している⁴。しかし一方で、これらは中央ユーラシア史・日本古代史・海

域アジア史の視点から提示されたものとも言え、「東部ユーラシア」に対する宋代史研究者の反応は概して乏しい。「東部ユーラシア」には中国史の相対化という意図が見られることが指摘されており〔古畑2021; 2022〕、中国史研究者からの応答が必要ではないかと感じられるが、宋代史に限らずそのような動きはあまり見られない。筆者は、宋代とくに北宋の軍事史研究を進めるうえで、軍事と国際情勢の関係にも着目し、「東部ユーラシア」の展開に位置づけることを試みてきた。本稿では、以上の学界動向も踏まえながら、筆者自身の問題意識に引き付ける形になるが、宋代史研究における「東部ユーラシア」の有効性・必要性について考えてみたい。

1. 「宋代中国」と東部ユーラシアの国際情勢

(1) 東部ユーラシアの政治的関係

「東部ユーラシア」と前後するように、宋代史研究を取り巻く潮流として近年活況を呈しているのは、国際情勢をめぐる研究であろう。

8世紀半ばの安史の乱以降、東部ユーラシアは唐・ウイグル・チベット（吐蕃）による三国鼎立状態にあったが、9世紀半ばにウイグル・チベットが相次いで瓦解するとその均衡は崩れ、諸集団の流動化・自立化が促進された。その後10世紀初頭における唐の滅亡も相俟って、東部ユーラシア情勢は大きく変動していく。その中で台頭したのが、キタイ（契丹）と沙陀、およびタングート（党項）であった。そして10世紀後半から11世紀半ばにかけて契丹・（沙陀を受け継いだ）北宋・タングート（のち西夏を建国）によって東部ユーラシアの三国鼎立状態が再現するのである。

このような東部ユーラシア情勢において注目されるのが、1004年に契丹・北宋間で成立した澶淵の盟に代表される「盟約」である。澶淵の盟では、相互に誓書が交わされ、国境の画定とその遵守・不可侵、国外逃亡した犯罪者の引き渡し、軍事施設の増設禁止や、北宋から契丹への歳幣などが誓書で定められたほか、両国間の擬制的親族関係、国境での公定交易場（榷場）の設置と管理貿

易, 定期的な使節の交換も付随して定められた。これらの取り決めは, 契丹・北宋双方がその維持に努めたこともあり, 結果として約120年にわたって軍事衝突が生じない“平和共存”が実現した。

また, この澶淵の盟は北宋—西夏間の盟約にも踏襲されたほか, のちに勢力間の関係は契丹—北宋の対等関係とは異なるものの, 金—南宋, 金—西夏, 金—高麗間にも踏襲・援用されており, 10世紀以降の東部ユーラシアにおける国際情勢・国家間関係を特徴付けるものであったと言える。すなわち, 澶淵の盟を契機として, 東部ユーラシアの諸勢力間における盟約の締結に基づく関係と, その遵守・維持のための仕組みが成立し, 「澶淵体制」や「盟約の時代」「盟誓体制」などとも称される, 多国併存状況が現出したのである⁵。

10世紀以降の東部ユーラシア情勢において, 澶淵の盟をはじめとする盟約が重要な役割を果たしていたことは疑う余地がないだろう。いっぽうでこの時期の東部ユーラシアにおいて, 諸勢力間の関係やさまざまなヒト・モノの移動が盟約によってのみ規定されていたわけではないことも, 当然ながら事実である⁶。

すなわち, 例えば政治的関係という点で見れば, そもそも盟約を結んでいない関係も多く見られるほか, 婚姻関係や擬制的親族関係, 冊封や朝貢のような古くから見られる関係も併存していた⁷。また, 北宋とベトナムのように, 冊封・朝貢関係を形成するいっぽうで和議を結ぶなど, 複数の関係が共存する場合もあった。すなわち, 10～13世紀の東部ユーラシアにおいては, 新たに出現した盟約が重要な位置を占めつつも⁸, そのほかの関係も併存しており, それらが各勢力(間)の事情に応じて選択され, 結果として多様な関係によって織りなされる国際情勢が形成されたと言える。

そして, 中国(宋朝)側の視点に立てば, 東部ユーラシアの覇権を契丹が掌握していた北宋期, 金が掌握していた南宋期において, それぞれ自らなりの国際秩序を志向・編制しようとしていたことが, 宋代の外交文書の書式・文言に着目した廣瀬憲雄氏[廣瀬2018]や, 宋朝とおもに西域諸国や東南アジア・海域アジア・西南中国勢力との冊封・朝貢関係に着目した遠藤総史氏[遠藤2017; 2018]によって指摘されている。10～13世紀の東部ユーラシアにおける

国際関係・国際秩序はもはや一元的・一極的なものではなく、多元的・多極的な様相を呈していたのであり、東部ユーラシアにおける「宋代中国」の政治的立ち位置を考える際には、諸勢力との関係を多元的に捉える必要があるだろう。

(2) 宋代中国の軍事情勢と外交

宋代の国際関係をめぐっては、かつて軍事的な脅威であった契丹・金・西夏そしてモンゴルこそが国際関係の対象であり、例えば『宋史』外国伝に立伝されるその他の高麗や吐蕃、中央アジア・東南アジア諸国、日本などは宋にとってそれほど重大な存在でないとの見方が示されていた〔衣川1996: 43〕。北宋にとっての契丹・西夏および金、南宋にとっての金およびモンゴルが、実際に軍事衝突が生じた相手でもあり大きな脅威として警戒・注意すべき存在であったことはその通りであろう。しかしながら、その他の勢力との関係が北宋・南宋にとって重要でなかったと断ずることには、筆者は疑問をもっている。北宋・南宋の軍事・外交情勢を考える際には、脅威度・優先度やその継続性には当然ながら差異があるものの、契丹・西夏・金・モンゴル以外の多くの勢力をも視野に入れて捉えるべきであり、それらを見捨てることは結局のところ「宋代中国」を国際情勢に位置づけるための材料を欠くことになるのではないだろうか。

さて、以上も留意しながら、まず北宋期の軍事・外交情勢を概観してみよう。

960年に五代最後の後周から禪譲を受けて成立した北宋（宋朝）は、「十国」諸国を相次いで征服・併合して979年に「中国」の一応の再統一を達成する。それと同時に、自らを取り巻く新たな東部ユーラシア情勢への対応という課題に直面していくこととなった。北方では強大な軍事力を擁する契丹との間で燕雲十六州をめぐる軍事衝突が激化し、西北方ではオルドス地域に拠るタングート李氏の領袖・李繼遷による反宋独立戦争が生じていく。また、南方では唐滅亡後の混乱を経て北部ベトナムに独立王朝を建てた前黎朝に対して遠征を行い、10世紀末の北宋は北方・西北方・南方における軍事的緊張を同時に抱えていた。かつ、これらの軍事的緊張はいずれも北宋側の失敗・劣勢に終わり、北宋は対

外的な拡張路線から防衛路線への方針転換を余儀なくされた。三勢力との軍事的緊張は、11世紀初頭にいずれも緩和に向かっていくが、契丹・タングート（のち西夏を建国）・ベトナム（のち前黎朝から李朝に交替）との軍事的・外交的緊張は断続的に生じており、それへの対応は北宋一代を通じた重要な課題であったと言える。

さて、11世紀初頭の緊張緩和をもたらした象徴的な出来事が、1004年に契丹・北宋間で成立した澶淵の盟であり、契丹—北宋関係の約120年間にわたる安定や東部ユーラシアの多国共存の国際情勢を現出したことは、上述の通りである。ただ、いっぽうで北宋の視点に立てば、強大な軍事力をもつ契丹に対してはその軍事行動を警戒する必要はあったし、西北方のタングートについては11世紀半ばに宋夏戦争が勃発して以降には和戦を繰り返すこととなり、南方のベトナムとの間においても11世紀半ばに宋越境界地帯で勃発した儂智高の乱をめぐる緊張や、11世紀後半のベトナムによる北宋侵攻や宋越戦争が生じるなど、これら三勢力に対する軍事的備えは不可欠であった。これらに対峙する地域は北宋朝廷でも「三方の急」として認識され軍事的にもつねに重視されていた[金成奎2000]。南方のベトナムについては、契丹やタングートと比べると脅威度や優先度は低くならざるをえなかったと考えられるものの、いっぽうで北宋にとって無視・放置できるものであったとは到底考えられない。むしろ契丹やタングート関係を優先せざるをえないという事情があるからこそ、南方における緊張や騒擾に対しては阻止・予防しようと神経を尖らせており、また速やかな対処が求められていた⁹。

これら三勢力への北宋の対応は、いわゆる「遠交近攻政策」であったとみなすことができる。すなわち、和戦の頻度はそれぞれ異なるものの、軍事衝突と和議（盟約）という直接的な軍事的・外交的対応が契丹・西夏・ベトナムに対しては基本路線であったと言える。また、この三方における緊張には共時性や連動性も見られ、北宋の軍事・外交情勢の展開については契丹・西夏・ベトナムの動向を踏まえたうえで、俯瞰して捉える必要があると言える¹⁰。

さらに、間接的な対応として、これらの勢力の“腹背”に位置する勢力との

連携という点も見逃すことはできないだろう。すなわち、契丹に対しては高麗やタタル、西夏に対しては甘州ウイグル・西ウイグル・敦煌帰義軍政権・西涼府チベット政権・青唐チベット王国、ベトナムに対しては占城・真臘・大理などとの連携を模索していた。これらがどれほど現実的であったのか、また実際に奏功したかは別として、北宋の軍事・外交政策を検討するには、これらの勢力の動向も視野に入れる必要はあるだろう。

以上を踏まえると、北宋の軍事・外交情勢において、契丹や西夏のみならず、直接的な軍事衝突を経験したベトナムはもとより、北宋と直接領域が接していない勢力も含めた近隣勢力の動向にも目を配る必要があるだろう。さらに言えば、北宋が介在しない諸勢力間の関係¹¹も含め、東部ユーラシアにおける入り組んだ諸勢力間関係のなかで「宋代中国」を位置づけるべきであろう。

また、南宋期においては、12世紀に入って勃興し契丹・北宋を相次いで滅ぼし、新たに東部ユーラシアに覇を唱えた金（女真）が最も重要な軍事・外交的勢力であったと言える。いっぽうで西北地域が斉国（劉斉／偽斉）を経て金の支配下に入ったために西夏とは境域が接しておらず、またベトナムとも11世紀後半以降は冊封・朝貢関係が安定して継続しており、南宋期に両者との軍事的緊張はほとんど生じていなかった。すなわち、南宋期に主に軍事的対応が必要であったのは金であり、金の滅亡後はその対象がモンゴル帝国に移る。実際に宋金境界地帯には総領所体制とも称される新たな軍事・財政体制が整備・確立され、南宋は金に備えていくのである¹²。

ただし、北宋期と同様に、直接的な軍事衝突のある金およびモンゴル以外との関係も、南宋の対外政策に影響していたと考えられる。例えば、南宋初期に海上を通じて高麗に使者を派遣して「仮道」「夾攻」を要請している〔姜吉仲2004〕。いっぽう、金の意を受けた斉国がベトナムに遣使し、南宋を牽制しようとする動きも見られる〔河原1975〕。また、北宋期には和戦を繰り返していた西夏との間には、金へ対抗するための連携を求めて通交が見られたことが確認できる〔佐藤2004〕。さらに、金によって西方に追われたカラキタイ（西遼）が中央アジアを中心に強大な勢力を有していたが、その金への遠征計画に南宋

が西夏を通じて協力関係を結ぼうとする動きも見られる [佐藤2004]。

当時の東部ユーラシアを見渡せば、金とカラキタイが東西に並び立つ二大国という構図であったが、12世紀末から13世紀初頭にはモンゴル高原がこの両者の“代理戦争”の状況にあったという近年の指摘がある [松田2015; 白石2017]。すなわち、モンゴル高原の統合を進めていたケレイト王国の最大の同盟相手が金であり、反ケレイト部族を通じてカラキタイがモンゴル高原に影響力を及ぼそうとしていた、という。これには否定的な見解もあり [宇野2023]、筆者に当否の判断はできないが、南宋の対金政策を考える際には、このようなモンゴル高原や中央アジア情勢の影響・関連にも注意する必要がある。13世紀初頭、チンギスの台頭によって金がモンゴル高原への対応に迫られるようになると、その機に乗じて南宋では韓侂胄が金への北伐を敢行する。また、モンゴルが金を攻めた際には、南宋も軍勢を派遣している。金の滅亡後に南宋がモンゴルの侵攻を蒙ると、高麗や日本との連携を模索していくようになる。

このように、南宋期には北宋期とはまた異なる軍事・外交情勢が形成されていたと言えるが、直接的な軍事衝突が見られた金・モンゴルのみならず近隣・周辺勢力の動向もやはり影響しており、それらを無視して南宋の軍事・外交情勢を捉えることには限界があると言えよう。

2. 北宋期の軍事情勢と軍事力

(1) 「軍事国家」としての宋

軍事史の視点から「宋代中国」を考える際に留意すべきと考えられるのが、宋朝の「軍事国家」という性格であり、その軍事力がいかなるもので、いかにして維持・運用されていたのか、という点であろう。

上述の通り、10～13世紀の東部ユーラシアにおいては多国併存状態が形成され、諸勢力の均衡が保たれていたと言える。いっぽうで、まったく緊張や衝突が生じなかったわけではないし、併存や均衡もある意味であくまでも“結果”であったと言える。北宋期について言えば、澶淵の盟以後も契丹は依然として

大きな脅威であり続けた。また、西夏との間では和戦が繰り返されて軍事的緊張を常に抱えていたし、ベトナムとの間でも緊張や衝突が生じていた。南宋期についても、1142年の紹興和議（皇統和議）成立以前の宋金戦争はもとより、その後の海陵王の南侵、韓侂胄の北伐、モンゴルと結んだ対金攻撃、対モンゴル防衛など、軍事力の維持は不可欠であったと言えよう。

このような軍事情勢に対応するために、当然ながら大量の軍事力を確保して配備する必要があるが、宋代の軍事力はときに100万を超えることもあった。宋代を通じて北方・西北方勢力を中心に対外的な軍事情勢は劣勢に立たされており、宋代は軍事的に弱体化した時代とのイメージは強い。ただ、そのような状況においても北宋・南宋を通じて約300年間宋朝が存続することができたのは、やはり軍事力に依るところが大きいと考えられる。また、周知の如く、北宋の創始者である太祖趙匡胤の即位は、後周の禁軍司令官たる殿前都点檢として掌握していた軍事力を背景としていた。さらに、太祖期・太宗（趙匡義）期における政権基盤や正統性の確立・安定には軍事力を掌握することが不可欠であった〔伊藤2019〕。

そして、軍事力や軍事体制の維持・運用、様々な軍需物資の調達・供給を支えるためには巨額の財源が必要であった。宋代では常時財政支出の8割を軍事費が占めており〔汪聖鐸1995〕、一代を通じて「戦時財政」であったと評される〔曾我部1941〕。そのため、宋代の経済・財政政策は軍事費の調達のために立案・施行されたと言えるという〔古松2013〕。

これらを踏まえると、強弱や勝敗はさておき、宋朝は軍事力を基盤として成立し、大量の軍事力の保持と軍事費に依って維持された「軍事国家」であったとみなすことができよう。

(2) 北宋の軍事基盤と東部ユーラシア

以上を踏まえ、主に北宋期に焦点を当てながら「宋代中国」の軍事情勢を支えた軍事力について考えてみたい。宋代、特に北宋軍事史については唐宋変革論の影響も強く、唐末五代以来の藩鎮跋扈・武人政治の弊害に鑑みての中央集

権・強幹弱枝や文治主義政策、それを支える禁軍や兵権の分掌などが注目されてきた。

これに対して、近年では中国・台湾を中心に唐宋変革論への批判的再検討も相俟って軍事史研究の新たな潮流が生じており、武人研究や軍事・武を再評価する成果が公表されている。また、北宋初期の軍事力においては非漢人・遊牧系の武人・軍事集団が多く見られることも指摘されており、中央ユーラシア史の展開や遊牧民の動向も視野に入れた北宋史という視点の必要性が提起されている¹³。

このような北宋軍事史研究の新潮流と密接に関連するのが、北宋を「沙陀軍団(王朝・政権)」の系譜に位置づける見方であろう。周知の通り、五代中原王朝のうち後梁を除く後唐・後晋・後漢・後周は、唐末に台頭したテュルク系沙陀の李克用軍団に淵源する。この沙陀軍団は李克用以来、拡大・再編を経ながらも後周まで至り、その王朝の交替や皇帝の継襲は、実質的には基盤であった軍団内部の指導者の交替であったと言える。そして、後周を継いだ北宋の趙匡胤も、李克用軍団から続く沙陀軍団内の政権交代の流れのなかから台頭したのであり、北宋もその系譜に位置づけられる¹⁴。その歴史的背景としては8世紀後半以降の北中国～中央ユーラシアにおける遊牧集団の動向が大きく影響していると考えられ¹⁵、このような時間・空間的視野から北宋の成立や展開を捉える必要もあろう。

澶淵の盟の成立によって契丹と対峙する北辺地域の軍事的緊張が緩和されて以降、北宋の軍事的重心は徐々に西北地域に移っていく。タングート李氏勢力との緊張は領袖・李繼遷が西涼府チベット政権を攻めた際に戦死し、後を継いだ李徳明が北宋との和議を選択して緩和されたが、西北地域に散在するタングート・チベット系諸集団(蕃部)の動揺・騒擾が生じていた。その後、李徳明を継いだ李元昊による称帝および西夏(自称は大夏)建国、北宋への宣戦布告による宋夏戦争(1038～1044年)が勃発すると、上述の通り両者の間で和戦が繰り返されて常に軍事的緊張を抱えることとなった西北地域が、北宋の軍事的最重要地域となったと言える。

このような北宋の軍事情勢の推移のなかで、その軍事行動を支える存在となっていたのが、蕃部から編制される蕃兵を含む、西北地域に展開する軍事力であった。彼らは北宋末には「西兵」と称され、精強さを備えた軍事力として大いに期待されるとともに、北宋にとって唯一頼れる軍事力であったことが金にも認識されるほどであった。実際に、西北地域の軍事力は対西夏戦線のみならず儂智高の乱や宋越戦争、四川瀘州蛮討伐にも投入されており、北宋末に至ると対西夏戦線から浙江で勃発した方臘の乱の鎮圧、金との同盟に基づく契丹の燕京攻撃、金の南伐に対する防衛、開封の救援・奪還などの軍事行動に立て続けに投入されていた。結局、金軍により北宋の都・開封は陥落して徽宗・欽宗をはじめとして宗室百官も連行されて北宋は滅亡するが（靖康の変）、西兵はその後も大きな存在感を示していた。例えば、南宋を復活させる高宗の下で軍事基盤となった御前軍、金・西夏の侵攻に晒される西北地域で軍備再建・抵抗を続ける曲端・張浚指揮下の軍団、川陝地域に後退した防衛体制を担った四川呉氏軍団などには西兵軍団が継承されていたと言える¹⁶。

以上、「軍事国家」としての北宋を支えた軍事力という視点に立てば、澶淵の盟を契機とする北方から西北方への軍事的重心の移行がみられるいっぽうで、北宋期を通じてその中核には遊牧系軍事力が含まれていたことが明らかである。また、その運用をめぐっては、西北地域のみならず北宋を取り巻く内外の軍事情勢も大きく影響していた。すなわち、多国併存状況において劣勢に立たされながらも約150年間に及んだ北宋の存続や、東部ユーラシアの均衡状態の維持の一端を担っていたとみなすことができる北宋軍事力は、その供給・運用に顕著に認められるとおり東部ユーラシアの歴史展開のなかに位置づけられる必要もあると言えよう。

3. 宋代の軍事・外交と経済・財政・交易

(1) 宋代軍事財政と物流¹⁷

上述の通り、宋代は財政支出の8割を軍事費が占めるほどの「戦時財政」で

あったと言える。その軍事費は、兵員の俸給をはじめとする人件費が大部分であり、その他様々な軍需物資の調達・輸送に係る財源も含まれている。

このような、軍事費の財源確保や投入、軍需物資の調達・供給などを支えていたのは種々の財政・経済・物流政策であったが、それは「中国」内部にとどまらず東部ユーラシアのネットワークとも無縁のものではなかったし、また当然ながら軍事・外交情勢とも密接に連動していたとみなすことができる。

唐後半期以降、「中国」の経済構造は南北をむすぶものへと転換していくが、「中国」再統一を達成した北宋期にはそれが決定的なものとなった。それは、とりわけ経済開発の進展が著しい江南の経済力をもって、北中国の軍需を支えるという構造であった¹⁸。その主要経路は、経済中心である江南から大運河によって国都開封へ物資が運ばれ、さらに開封から対契丹・対西夏前線地域を結ぶ「辺境(軍)―都(政治)―長江下流域(財源)」システム[妹尾1999]であり、北宋期については「開封システム」[平田2008]とも称される。また、対西夏前線地域と長江上流域の四川とを結ぶ経路も重要であった。北中国を喪失して南中国に領域が限定された南宋期には、淮河から秦嶺山脈にいたる防衛線を四つのブロックに分けて財務機関である総領所を設置するとともに、各総領所に軍糧調達地域が設定される補給体制が確立された[長井2008]。

このように、宋代においては全国的規模の市場・流通圏が形成され、「客商」と呼ばれる遠隔地商人の活動と、大運河を基軸とする水運による物流がそれを支えていた。北宋期においては全国的な物流は政府主導で編成されていたものであった(財政的物流)が、客商へ支払う対価として現金(銅銭)や銅銭・塩・茶などと引き換えることができる有価証券である鈔引(交引・塩鈔・茶引)を支給する方式が定着した。いっぽうで、江南から長距離・長時間の輸送は困難であり、むしろ軍事前線への軍糧納入は軍事路や数州程度の地域内部で現地商人(土人)によって大部分がまかなわれ、地域経済圏・物流圏の形成が指摘される¹⁹。これらの経済圏・市場圏・流通圏は重なり合っていたと理解されよう。

(2) 東部ユーラシアの交易ネットワークと宋代中国

このような構造を支える財源は現金（銅銭）のみならず各種鈔引であり、これらに加えて大量の絹織物や香薬も財源として投入されていたが、そのためには大量の銅銭や絹織物・香薬さらには鈔引の交換対象となる塩・茶などを確保しておく必要があった。銅銭は政府による大量鑄造・発行、絹織物・塩・茶は各地の生産、香薬は西域・南海諸国からの輸入により、それぞれ主に調達されていた。そして、これらの物品の動きは「中国」内部にとどまらず、交易ネットワークを介して東部ユーラシア各地にも及んでいた。

宋代すなわち10～13世紀の交易ネットワークについて、これまでは五代・宋代にかけて大きく発展した海上交易が陸上交易に取って代わり、ユーラシア東西を結ぶ主要幹線も陸から海へと転換したと述べられることが多かったように思われる。とりわけ「中国」は、契丹・西夏・金の勃興によって、西域との陸上交易が阻害されていたとされる。しかしながら、現在では10世紀以降においても、シルクロード交易を軸とする陸上交易は活況を保っていたことが明らかにされており、そこには「宋代中国」も結び付けられていただけでなく、「宋代中国」が東部ユーラシアにおける陸・海の交易ネットワークをつなぐ結節点の役割を果たしていたとも考えられるのである。

この時期の陸上・陸上交易を担っていた人々として注目されるのが、かつてユーラシア規模の交易ネットワークを形成して国際商人として活躍したソグド商人のネットワークを継承したウイグル商人である²⁰。9世紀半ば、モンゴル高原の東ウイグル可汗国の滅亡によって、河西地域や天山地域のオアシス地域に成立した甘州ウイグルや西ウイグルは、オアシス都市を結ぶ交易に積極的に関わるようになっていた。周知のように、ソグド人の交易活動において、突厥やウイグルなど遊牧国家との共生関係が重要であった。9世紀以降にはソグド人とトルコ系遊牧民との間の文化的・経済的交流や混血も深まっていたことが確認されるが、「ウイグル国内のソグド商人」すなわち「ソグド系ウイグル商人」が陸上東西交易の主要な担い手となっていたのである。

東部ユーラシアにおけるウイグル商人については、例えば契丹がウイグル商

人のために「回鶻營」と呼ばれる商業拠点を設定したことや、日常的に契丹領内をウイグル商人が訪れていたこと、北宋への契丹使節に随行して北宋領内でも交易活動を行っていたこと、金の燕京に西ウイグルや西夏からウイグル商人が訪れていたことなどが知られる。また、西ウイグルや甘州ウイグルからの宋・契丹への朝貢使節にはソグド姓を冠するものたちの名が多く確認できるほか、契丹からガズナ朝へ派遣された使節団にもウイグル商人が含まれていたと考えられている。ソグド商人の交易ネットワークを継承したウイグル商人は、北中国～モンゴル高原～河西地域～中央アジア～西北インドに及ぶウイグル・ネットワークを形成し、東部ユーラシアにおける陸上交易の活況をもたらしたと言えよう。

海上交易については、9世紀半ばに東シナ海域へ、10世紀半ばに南シナ海域へ、中国海商の進出が見られるようになり、12・13世紀には南インドにまで中国海商の活動を確認することができる²¹。中国海商の中には、東南アジアや日本・高麗などに居留区を形成するものも現れ、現地での華人社会が形成されるようになる。また、唐代に中国にもその活動域を伸ばしたアラブ・ペルシア系のムスリム海商は、唐末・黄巢の乱によってその活動が下火になったものの、その後再び活況を取り戻すと、宋代には広州や交州・福建・揚州などに来航し、なかには居住区（蕃坊）を形成するものもいた。宋代において、中国海商とムスリム海商の交易ネットワークは地域的な競合も見られたものの、基本的には重なり合いながら共存していたと考えられる。なお、このような中国海商・ムスリム海商の中には東南アジア・南海諸国による宋への朝貢を主導したり（時には朝貢を騙っていた）、上表文の翻訳を行うものも見られる〔遠藤2021; 向2024〕。

このような商人たちのネットワークのもとで東部ユーラシアを“動いて”いたのが、多様な“モノ”である。以下、いくつかを取り上げて、その動きを辿ってみたい。

まず、古くから交易品として知られる中国産絹織物は、宋代においても様々な形で東部ユーラシアに広く流通していたことが確認できる。そもそも、「中

国」(北宋・南宋)から契丹・西夏・金に対して歳幣(歳賜・歳貢)という形で絹織物が贈られていたが、それぞれ内部での再分配や、西域・内陸諸国に対する賜与・贈与、あるいは輸出に供されていた。中国産絹織物はトルコ語で「žünkim ジュンキム」や「loxtāy ロクタイ」と呼ばれており、ウイグル語文書やカラハン朝で編まれたカーシュガリー『トルコ語大辞典』・『クタドゥグ・ビリグ』などから西ウイグルやカラハン朝、さらにはガズナ朝にも流通していたことが知られる²²。また、カラホト(黒水城)出土の12世紀中葉の「榷場関連文書」からは、金・西夏間の榷場交易において取引される商品の中に「河北絹」「川絹」の名を確認できる[佐藤2006]。さらに、12世紀中葉に定められた西夏語法典『天盛改旧新定禁令』の交易関連規定において、西夏では中国産絹織物の輸出が禁止されておらず、西夏から西方への流入が想定される[佐藤2003]。このような歳幣絹に由来する流れのほか、西域諸国が宋に遣使・朝貢した際の回賜品としての絹織物も確認できるが、それは西域諸国に限られていたわけではなく、東南アジア・南海諸国や日本に対しても下賜されていた。

9, 10世紀以降の海上交易の発達を背景に、東南アジア・南アジア海域世界の熱帯・亜熱帯産物が窓口である市舶司を通じて「中国」にもたらされていた。中でも乳香・沈香・白檀などの香薬の類は「中国」で珍重されて広く流通し先述の通り軍事費の財源ともなっていたほか、北宋・南宋から契丹・西夏・金や高麗・日本などへ榷場交易や下賜・回賜を通じて転売されていた[古松2013]。

また、宋代には東部ユーラシアの各地で銅銭の鑄造・流通が見られる。上述の通り、宋代中国では大量の銅銭の鑄造によって財政が支えられていたし、契丹・西夏・金においても銅銭の鑄造が行われていた。すなわち、各国で銅銭が鑄造されていたのであるが、各国の貨幣経済・錢貨流通を支えていたのは、宋銭あるいは唐銭(開元通宝など)であったと考えられる。また、宋銭の流通範囲は、サハリンや沿海州、モンゴル高原、朝鮮半島、日本、ベトナム、インドネシアにも及んでいる。各地で発見された一括出土銭・個別出土銭の分析によれば[三宅2018]、朝鮮半島・日本やベトナム・インドネシアに流入した宋銭は、渡来銭として受容され、それぞれの経済圏に組み込まれたという。いっぽ

うで沿海州やモンゴルでは、地域内通貨としても通用しつつ、中国との交易での決済手段として使用されることで中国へ還流することが前提であり、サハリンでは装飾品としての経済外的使用の意味合いが強かったと考えられている。また、各地域では中国銭以外の銅銭も少量ながら発見されており、宋銭に限らず銅銭を受容・共有するようなゆるやかな経済圏が形成されていたとみなすことができよう〔宮澤2007〕。なお、それぞれの地域での銅銭の用途・機能については、上述の通り決済手段や装飾品のほか、船体の安定のために船底に積載されるバラストとしての役割も指摘される。

このほか、宋代以降、日本から「中国」への輸出が爆発的には増加した硫黄については、宋の軍事前線に配備する火器生産に要する火薬原料としての需要が背景にあったことが指摘される〔山内2009〕。さらに日本のほか、インドネシアのジャワ島、さらには西アジアのペルシア湾・紅海地域からも大量の硫黄が「中国」に流入しており、宋代における軍事受容を背景とした東部ユーラシア、さらには西アジアをも含む硫黄流通の広がりが確認でき、山内晋次氏はこれを「硫黄の道 Sulfur Road」と呼ぶ²³〔山内2009〕。

以上のように、宋代の東部ユーラシアにおいては、陸上交易ではウイグル商人、海上交易では中国海商やムスリム海商による交易ネットワークが形成され、様々な物品が「中国」とも往来していたことが分かる。そして、このような陸上交易・海上交易を結びつける役割を果たしていたのが、「中国」内部における物流・交易を担う中国商人であり、沿岸都市に設置される市舶司や、内陸境界に設置される榷場（和市場、博易場なども）での「互市貿易」であった。「中国」内地で活動する中国商人には主に遠隔地交易に従事する「客商」と、地域内交易に従事する「土人」とがいたが、彼らが「中国」内部の物流や交易を支えていたことは、上述の通りである²⁴。海上交易を管理する市舶司は明州・福州・広州・泉州・杭州・密州などに設置されていた。陸上交易においては、契丹・西夏・金との境界地帯に榷場が設置されたほか、青唐チベットなどチベット諸族との間での互市場や、ベトナム境界地帯の博易場などが設置されていた。また、契丹—高麗、金—西夏、金—高麗間でも榷場が設置されていた。このよ

うに、市舶司や榷場を結節点として、東部ユーラシアの交易ネットワークは内陸―「中国」―海域世界と連結されていたのである〔Shiba 1983〕²⁵。

以上、宋代における東部ユーラシアにおける交易ネットワークをめぐって、ヒト（商人）とモノ（商品・貨幣）とに着目してその流れを概括してみた。「中国」に設置される市舶司や榷場を結節点とし、「中国」内部の流れも介しながら、内陸・海域双方の交易ネットワークが結びついていたことが確認されよう。また、交易に従事する商人が朝貢・外交使節としての一面も有すること²⁶、盟約およびその付随事項として定められた歳幣や榷場が重要な位置を占めていること、硫黄の流通に見られるように軍事情勢との関わりが見られることなど、東部ユーラシアにおける交易ネットワークは、諸勢力・地域（間）の政治・軍事・外交・経済的な関係と連動しており、これらが重層的に作用しながら様々なヒト・モノによって織り成されるものであったと言えよう。

おわりに

本稿では、「宋代中国」と「東部ユーラシア」との関わりについて、とりわけ軍事史および関連テーマに絞って取り上げた。言及したトピックや個々の事例は、それぞれについてさらなる検討が必要なものもあろうし、本稿では言及できなかったものも多く残されていよう。しかしながら、「宋代中国」の歴史展開を軍事の視点から眺めてみれば、「中国」内部で完結して理解するのはやはり難しく、「中国」の「外」にも目を向けておく必要があると、改めて強く感じられるのではないだろうか。また、軍事だけではなく、その他の情勢や政策などの展開との関連・連動も併せ見る必要もあるだろう。その際に、“「中国」の「外」”の空間的範囲をどこまで想定するかについては、検討する対象次第となるが「東部ユーラシア」はその有効な空間設定のひとつと言えるだろう。

なお、筆者が「東部ユーラシア」という枠組みや視点をもつことに肯定的・積極的な立場であることは明らかなと思われるが、宋代史研究において必ず

「東部ユーラシア」の視点を持つべきである、「宋代中国」のあらゆる事象が「東部ユーラシア」と関わっている、などと主張するつもりは毛頭ない。また、「東部ユーラシア」の定着にともない、それと対置されるようになった「東アジア(世界)」についても、否定する気はない。歴史研究においてどのような地域・空間を設定するか、そしてその必要性については、それぞれのテーマ・問題意識によるであろうし、それに応じて視点の切り替えが可能な選択肢として、「東部ユーラシア」・「東アジア」・「中国」や「中国」内部の各地域などの枠組みを意識するほうがよいように感じられる²⁷。

本稿は軍事面に絞ったものの、宋代史研究における「東部ユーラシア」という空間的枠組みの有効性が確認されるのであれば、今なお国内外の学界で大きな影響力を有しつつも批判的再検討の必要性が提起されている唐宋変革論²⁸について、「東部ユーラシア」の視点から歴史展開を捉え直すことも可能となろう。これまで提起されていた唐宋変革論の再検討については、時間的枠組みに重点が置かれていたように思われるが²⁹、空間的な枠組みについても考慮する必要がある³⁰。その意味で、完結したばかりの「岩波講座世界歴史」第3期第7巻において、唐宋変革期の東アジアとして、「東アジア」に北アジア・中央アジアも含めて時代・空間設定がなされ、その一体性・連動性を提示しているのは注目される[宮澤2022]。ただいっぽうで、ここでは「中国」を経済・文化的な中心として位置付け、その中心たる「中国」からの影響が一方的に「周辺」に及び、とくに文化的なまとまりとしての「東アジア世界」が想定されているように思われる³¹。このような見方は、軍事的・外交的な劣勢に立たされた「宋代中国」像の裏返しのように感じられるが、「東アジア」なり「東部ユーラシア」なり、「宋代中国」を含む空間がどのようなまとまりとして理解できるのか、今後も多角的な検討が必要となろう。

注

1 最近では飯山2019。このほか、飯山ほか2009; 青木2014なども参照。

2 「東部ユーラシア」と類似する語として「東ユーラシア」「ユーラシア東部」「ユーラ

シア東方」なども使用されているが、本稿では個々の所説に直接言及する場合を除き便宜的に「東部ユーラシア」に統一する。なお、これらの語が意味するところは、仮に同じ語であっても研究者によって異なる場合もあるので注意する必要がある。本稿では、おおむねユーラシア大陸の東半、および大陸東端・東南端の海域・島嶼部を広く想定している。

- 3 「東部ユーラシア」については、伊藤2023で整理を試みたので、関連する文献はそちらを参照されたい。伊藤2023以降に発表されたものとして、古松2024: 序章および終章や荒川2024も参照。
- 4 すべてを挙げることはできないが、例えば古松2024; 廣瀬2014; 2018; 山内2009; 2011。詳しくは伊藤2023を参照。なお、「東部ユーラシア」を使用しているものに限ってはいないが、その他の関連する研究（者）については Endo et al. 2018にて紹介されている。
- 5 北宋期には契丹が優位に立つ契丹—北宋関係が主軸となり、それが南宋期の金—南宋関係にも変化をとめないながら継承されていく。このような10～13世紀における東部ユーラシアの国際情勢をめぐる研究は枚挙に暇がないが、差し当たり古松2007; 2011; 2020b; 2024; 毛利2008; 2020; 井黒2010; 金成奎2015; 山崎2017; 廣瀬2018を挙げておく。
- 6 無論、この時期の東部ユーラシア情勢が盟約によってのみ規定されていたと論じている研究者がいるわけではない。
- 7 例えば、契丹と近隣勢力との関係について、北宋・高麗・西夏・青唐チベット・西ウイグル・カラハン朝・タタルなどが、いずれも契丹と盟約・通婚・冊封・朝貢など何らかの政治的関係を結んでいたことが指摘される [古松2024: 560]。
- 8 なお、澶淵の盟の先駆としては820年代の唐・ウイグル・チベットの三国会盟、10世紀初頭の契丹—沙陀間の雲中の会盟、974年の契丹—北宋間の和議などが指摘されている [毛利2006; 井黒2013; 古松2020a; 2020b など]。
- 9 北宋にとっての南方情勢や対ベトナム関係の重要性については、例えば河原1984; 岡田1993を参照。
- 10 三方の対外軍事情勢の共時性や連動性については、伊藤2018; 2021で概観ながら指摘している。
- 11 いくつか例を挙げれば、大越と占城・真臘との抗争、契丹と西夏の抗争・冊封関係、契丹・ウイグルとカラハン朝との抗争など。
- 12 南宋期の総領所体制、および関連研究については長井2008; 雷家聖2013を参照。
- 13 北宋軍事史研究の展開については、極めて簡略であるが伊藤2019: 1-2で述べた。個別の研究については伊藤2019所引文献を参照。
- 14 このような見方は、近年「沙陀（系）王朝」論などと言われ定着しつつあるように思われるが、ここでいう「沙陀（系）王朝」とは、支配者が沙陀系であること、遊牧国家であることなどを主張するものではない。富田孔明氏は、一連の研究によって、五代後唐・後晋・後漢の創始者（李存勖・石敬瑭・劉知遠）がそれぞれ沙陀系

であること、五代各各皇帝あるいはその祖が李克用軍団に属していたこと、李克用軍団に属していた武人やその後裔がその後の五代諸王朝で重んじられていたこと、の三点に基づき、李克用軍団から後周に至る連続性を示し、さらに北宋の最高政務機関である二府（民政：中書門下省／軍政：樞密院）の起源が李克用藩鎮に遡ることから、その政権の連続性が北宋にも及ぶことを指摘する〔富田1986; 1987; 1989; 1991; 1994〕。また、このような連続性については、唐末五代期における非漢人・遊牧系の武人・軍事集団の存在や活動形態、北宋初期の軍事基盤への継承などを解明した、近年の沙陀・テュルク・ソグド研究などの成果によっても裏付けられている。ここでは代表的なものとして森部豊氏の一連の研究〔森部2010所収〕を挙げるに留めるが、その他については伊藤2019: 注9も参照。また、「沙陀（系）王朝」については、古松2020a: 83-100; 森部2023も参照。

- 15 このような見通しやそのもととなった関連研究は、伊藤2019: 21-25を参照。
- 16 このような西北軍事力・「西兵」の意義や展開・動向については伊藤2018; 2021で概観した。また、河原1984; 岡田1993; 伊藤2011; 鄒笛2019; 古松2020; 張哲饒2021a; 2021b; 森本2024なども参照。
- 17 以下、財政・物流をめぐるのは古松2013に多く拠っている。また、基本的な研究は到底挙げきれものではないが、斯波1968; 1988; 宮澤1998; 島居2012など。
- 18 周知の如く、このような「中国」における南北構造は宋代以後にも続いていくが、北中国は中央ユーラシア世界と、南中国は東南アジア・海域世界とそれぞれ連続しており、南北経済構造もさらに北方・南方まで連結されていたとも考えるべきであろう。このような見方を明確に示しているのが岩波新書の「中国の歴史」シリーズであり、第2巻〔丸橋2020〕と第3巻〔古松2020a〕が宋代を対象としてそれぞれ扱っている。
- 19 地域経済圏や流通圏については、西奥2001; 2006; 後藤2002; 程龍2006などを参照。
- 20 以下、ウイグル商人については、森安1991; 2015; 畑地2012; 松井2013; 2014などを参照。
- 21 宋代の海上交易の概観については桃木（編）2008; 榎本2010; 山内2014; 中村2024など。
- 22 「žünkim」は「絨錦」「戎錦」, 「loxtāy」は「鹿胎」と対応し、それぞれ河北産絹織物、四川産絹織物と考えられる。これらの対応、および流通については森安1991; 2015; 松井2013; 2014などを参照。
- 23 なお、「中国」の硫黄の流入は、朝鮮半島や内陸アジアからも確認できるが、それは極めて小規模であり、火薬原料としてではなく薬用であったと考えられている〔山内2009〕。
- 24 例えば佐伯富氏は、このような中国商人の中でも山西出身の山西商人の重要性に着目している〔佐伯2000〕。
- 25 また、南宋期には海上交易の窓口となる市舶司では商人がもたらす情報が集積され、「南海交易ハンドブック」と呼びうるような書物が相次いで編まれていく。代表的なものに周去非『嶺外代答』や趙汝适『諸蕃志』などがある〔桃木1999〕。

- 26 本稿では言及できないが、商人は宗教伝道者という一面もしばしば備えている。
- 27 筆者自身、これまで「東部ユーラシア」を常に意識していたわけではない。
- 28 日本における唐宋変革論の展開や学説史の整理、海外の学界への影響については、丸橋2001; 山根2004; 妹尾2007; 青木2014; 山根2022などを参照。
- 29 唐宋変革論の対象とする時期をめぐることは、例えば山根2022を参照。唐宋間以外に画期については中島2005のほか、櫻井2023に国内外の研究動向がまとめられている。
- 30 唐宋変革論の対象とする空間をめぐることは、例えば青木2014; 山根2022などを参照。
- 31 本巻では、この「東アジア」と重なりつつも異なる空間として、船田善之氏が中央ユーラシアと東アジアを接合ないし統合した契丹・金・西夏・モンゴルに着目し、その勃興した空間、契丹・金・西夏の全域およびモンゴル帝国の中核部分を含む「東北ユーラシア」を設定し、その歴史展開を叙述している〔船田2022〕。

参考文献

Endo Satoshi, Iiyama Tomoyasu, Ito Kazuma, Mori Eisuke

2019 “Recent Japanese Scholarship on the Multi-State Order in East Eurasia from the Tenth to Thirteenth Centuries”, *The Journal of Song-Yuan Studies*, 47: 193-205.

SHIBA Yoshinobu

1983 “Song Foreign Trade: Its Scope and Organization”, Morris Rossabi (ed.) *China among Equals: The Middle Kingdom and Its Neighbors, 10th-14th Centuries*, Berkeley/Los Angeles/London, University of California Press: 89-115.

青木敦 2014 「宋朝の定位二：近世論と唐宋変革論」 青木敦『宋代民事法の世界』慶應義塾大学出版会：313-357.

荒川正晴 2024 「ユーラシア東部論再考：「世界」の一体化への胎動を如何に考えるか」『史学研究』318: 1-29.

飯山知保・久保田和男・高井康典行・山崎覚士・山根直生

2009 「『宋代中国』の相対化」宋代史研究会（編）『『宋代中国』の相対化』汲古書院：1-11.

飯山知保 2019 「ユーラシア東部における「唐宋変革」期」千葉敏之（編）『歴史の転換期4 1187年：巨大信仰圏の出現』山川出版社：256-277.

井黒忍 2010 「金初の外交史料に見るユーラシア東方の国際関係：『大金弔伐録』の検討を中心に」荒川慎太郎・高井康典行・渡辺健哉（編）『遼金西夏研究の現在』3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所：31-45.

井黒忍 2013 「受書礼に見る十二～十三世紀ユーラシア東方の国際秩序」平田茂樹・遠藤隆俊（編）『外交史料から十～十四世紀を考える』汲古書院：211-236.

- 伊藤一馬 2011「北宋における将兵制成立と陝西地域：対外情勢をめぐって」『史学雑誌』120-6: 39-61.
- 伊藤一馬 2018「北宋期のオルドス地域とその軍事的意義」村井恭子(研究代表)『文物考古資料による唐～宋代オルドス地域の歴史的構造の研究』平成27～29年度科学研究費補助金(基盤研究C)成果報告書, 神戸大学: 35-54.
- 伊藤一馬 2019「北宋太祖・太宗期の内外軍事情勢と軍事指揮官：都部署を中心に」『大阪大学大学院文学研究科紀要』59: 1-34.
- 伊藤一馬 2021「北宋最強軍団とその担い手たち：澶淵の盟から靖康の変へ」京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター(編)『金(女真)と宋：12世紀ユーラシア東方の民族・軍事・外交』研文出版: 67-108.
- 伊藤一馬 2023「「東部ユーラシア」の現在」『神女大史学』40: 53-81.
- 宇野伸浩 2023「初期グローバル化としてのモンゴル帝国の成立・展開」荒川正晴ほか(編)『岩波講座世界歴史 10 モンゴル帝国と海域世界：一二～一四世紀』岩波書店: 3-39.
- 榎本渉 2010『僧侶と海商たちの東シナ海』講談社.
- 遠藤総史 2017「未完の「統一」王朝：宋朝による天下理念の再構築とその「周辺」」『史学雑誌』126-6: 36-61.
- 遠藤総史 2018「南宋期における外交儀礼の復興と再編：南宋の国際秩序と東南アジア・中国西南諸勢力」『南方文化』44: 1-23.
- 遠藤総史 2021「宋代の朝貢と翻訳：南の海域世界との関係を中心に」『東方学』141: 85-101.
- 汪聖鐸 1995『両宋財政史』上・下, 中華書局.
- 岡田宏二 1993『中国華南民族社会史研究』汲古書院.
- 河原正博 1975「李朝と宋との関係(1009-1225)」山本達郎(編)『ベトナム中国関係史』山川出版社: 29-82.
- 河原正博 1984『漢民族華南発展史研究』吉川弘文館.
- 衣川強 1996「両宋王朝をめぐり国際関係：時代の俯瞰図」佐竹靖彦ほか(編)『宋元時代史の基本問題』汲古書院: 43-67.
- 姜吉仲 2004『高麗与宋金外交経貿関係史論』文津出版社.
- 金成奎 2000『宋代の西北問題と異民族政策』汲古書院.
- 金成奎／洪性珉(訳)
2015「誓書：10－13世紀東アジアの安全保障策」『史滴』37: 7-28.
- 後藤久勝 2002「北宋における商業流通の地域構造：『宋会要輯稿』所収熙寧十年商税統計を中心として」『史淵』139: 63-94.
- 佐伯富 2000「中国近世における山西商人(宋代)(一)(二)(三)」『問題と研究』29-10: 63-89; 29-11: 51-76; 30-1: 33-70.
- 櫻井智美 2023「宋元明移行期論の受容と唐宋変革論の相対化」氣賀澤保規(編)『論集 隋唐仏教社会とその周辺』汲古書院: 323-344.

- 佐藤貴保 2003「西夏法典貿易関連条文訳註」森安孝夫・坂尻彰宏（編）『シルクロードと世界史』大阪大学大学院文学研究科：197-255.
- 佐藤貴保 2004「十二世紀後半における西夏と南宋の通交」『待兼山論叢（史学篇）』38: 1-24.
- 佐藤貴保 2006「ロシア蔵カラホト出土西夏文『大方広仏華嚴經』経帙文書の研究：西夏榷場使関連漢文文書群を中心に」荒川正晴（研究代表）『東トルキスタン出土「胡漢文書」の総合調査』平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書，大阪大学：61-76.
- 斯波義信 1968『宋代商業史研究』風間書房．
- 斯波義信 1988『宋代江南経済史の研究』汲古書院．
- 島居一康 2012『宋代財政構造の研究』汲古書院．
- 白石典之 2017『モンゴル帝国誕生：チンギス・カンの都を掘る』講談社．
- 鄒笛 2019「北宋末の太原戦役の再考：北宋滅亡の軍事過程について」『東洋学報』101-2: 1-27.
- 妹尾達彦 1999「中華の分裂と再生」『岩波講座世界歴史 9 中華の分裂と再生』岩波書店：3-82.
- 妹尾達彦 2007「世界史の時期区分と唐宋変革論」『中央大学文学部紀要』216（史学52）：19-68.
- 曾我部静雄 1941『宋代財政史』生活社．
- 張哲饒 2021a「北宋神宗朝における瀘州南部の開拓：瀘州義軍の成立と羈縻体制をめぐって」『歴史文化社会論講座紀要』18: 23-42.
- 張哲饒 2021b「瀘州涪井監の設置と塩資源：宋朝辺境統治の一側面」『史林』104-3: 33-66.
- 程龍 2006『北宋西北戦区糧食補給地理』社会科学文献出版社．
- 富田孔明 1986「五代の禁軍構成に関する一考察：李克用軍団の変遷について」『東洋史苑』26/27: 83-115.
- 富田孔明 1987「五代侍衛親軍考：その始源を求めて」『東洋史苑』29: 1-32.
- 富田孔明 1989「五代の枢密使：その沿革についての新たな考察」『龍谷史壇』95: 46-64.
- 富田孔明 1991「宋二府の沿革に関する考察：その起点と転換点を明確にして」『東洋史苑』37: 25-37.
- 富田孔明 1993「宋二府の沿革に関する考察（続）：五代宋における二種の相質について」『東洋史苑』40/41: 74-95.
- 長井千秋 2008「南宋の補給体制試論」『愛大史学：日本史学・世界史学・地理学』17: 1-24.
- 中島楽章 2005「宋元明移行期論をめぐって」『中国：社会と文化』20: 482-500.
- 中村翼 2024「前近代東アジア海域の性格をめぐる覚書：インド洋海域・東南アジア海域との比較から」『社会経済史学』89-4: 87-108.
- 西奥健志 2001「北宋の西北辺における軍糧輸送と客商」『鷹陵史学』27: 29-52.

- 西奥健志 2006「宋代の物流と商人：軍糧納入への関わりを中心として」『鷹陵史学』32: 1-26.
- 畑地正憲 2012『宋代軍政史研究』北九州中国書店.
- 平田茂樹 2008「日本の宋代政治史研究の新たな可能性：国家史・国制史研究との対話を求めて」『中国史学』18: 141-158.
- 廣瀬憲雄 2014『古代日本外交史：東部ユーラシアの視点から読み直す』講談社.
- 廣瀬憲雄 2018『古代日本と東部ユーラシアの国際関係』勉誠出版.
- 船田善之 2022「キタイ・タングト・ジュルチェン・モンゴル：覇権の遷移とその構造」荒川正晴ほか(編)『岩波講座世界歴史07 東アジアの展開：八～一四世紀』岩波書店: 81-112.
- 古畑徹 2021『渤海国と東アジア』汲古書院.
- 古畑徹 2022「東(部)ユーラシア史という考え方：近年の日本における古代東アジア史研究の新動向」古畑徹(編)『高句麗・渤海史の射程：古代東北アジア史研究の新動向』汲古書院: 209-227.
- 古松崇志 2007「契丹・宋間の澶淵体制における国境」『史林』90-1: 28-61.
- 古松崇志 2011「十～十三世紀多国並存時代のユーラシア(Eurasia) 東方における国際関係」『中国史学』21: 113-130.
- 古松崇志 2013「宋遼金～元：北方からの衝撃と経済重心の南遷(10～14世紀)」岡本隆司(編)『中国経済史』名古屋大学出版会: 131-162.
- 古松崇志 2020a『草原の制覇：モンゴル時代まで』岩波書店.
- 古松崇志 2020b「十～十二世紀ユーラシア東方における「多国体制」再考」『唐代史研究』23: 14-40.
- 古松崇志 2024『ユーラシア東方の多極共存時代：大モンゴル以前』名古屋大学出版会.
- 松井太 2013「契丹とウイグルの関係」荒川慎太郎・澤本光弘・高井康典行・渡辺健哉(編)『契丹[遼]と10～12世紀の東部ユーラシア』勉誠出版: 56-69.
- 松井太 2014「ソグドからウイグルへ」森部豊(編)『ソグド人と東ユーラシアの文化交渉』勉誠出版: 261-275.
- 松田孝一 2015「チンギス・カンの国づくり」白石典之(編)『チンギス・カンとその時代』勉誠出版: 1-28.
- 丸橋充拓 2001「『唐宋変革』史の近況から」『中国史学』11: 149-169.
- 丸橋充拓 2020『江南の発展：南宋まで』岩波書店.
- 三宅俊彦 2018「10-15世紀東ユーラシアにおける錢貨流通」『東洋史研究』77-2: 1-40.
- 宮澤知之 1998『宋代中国の国家と経済：財政・市場・貨幣』創文社.
- 宮澤知之 2007『銅錢の世界：錢貨から経済史へ』思文閣出版.
- 宮澤知之 2022「東アジア世界の連動と一体化」荒川正晴ほか(編)『岩波講座世界歴史07 東アジアの展開：八～一四世紀』岩波書店: 3-46.
- 向正樹 2024『クビライと南の海域世界』大阪大学出版会.
- 毛利英介 2006「澶淵の盟の歴史的背景：雲中の会盟から澶淵の盟へ」『史林』89-3: 75-

105.

- 毛利英介 2008「1099年における宋夏元符和議と遼宋事前交渉：遼宋並存期における国際秩序の研究」『東方学報』82: 119-167.
- 毛利英介 2020「十～十三世紀東アジア（Asia）国際関係史研究に関する随想」『中国史学』30: 131-145.
- 桃木至朗 1999「南の海域世界：中国における南海交易と南海情報」『岩波講座世界歴史 9 中華の分裂と再生』岩波書店：109-130.
- 桃木至朗（編）
2008『海域アジア史研究入門』岩波書店．
- 森部豊 2010『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』関西大学出版部．
- 森部豊 2023「後唐・後晋：沙陀突厥系王朝のはじまり」山根直生（編）『五代十国：乱世のむこうの「治」』勉誠社：43-53.
- 森本創 2024「南宋高宗朝期の都大提举茶馬司と四川行政機構：四川制置司・総領所との関係を中心に」『東洋学報』105-3: 31-66.
- 森安孝夫 1991「ウイグル＝マニ教史の研究」『大阪大学文学部紀要』31/32: 1-250.
- 森安孝夫 2015『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋大学出版会．
- 山内晋次 2009『日宋貿易と「硫黄の道」』山川出版社．
- 山内晋次 2011「東アジア史再考：日本古代史研究の立場から」『歴史評論』26: 83-108.
- 山内晋次 2014「東アジア海域論」大津透ほか（編）『岩波講座日本歴史 20 地域論』岩波書店：89-114.
- 山崎覚士 2017「帝国の中世：中華帝国論のはざま」渡辺信一郎・西村成雄（編）『中国の国家体制をどうみるか：伝統と近代』汲古書院：187-208.
- 山根直生 2004「『唐宋政治史研究に関する試論：政治過程論，国家統合の地理的様態から』『中国史学』14: 187-207.
- 山根直生 2022「『唐宋変革』とはいつか，どこか」『七隈史学』24: 61-80.
- 雷家聖 2013『聚斂謀国：南宋総領所研究』萬卷楼．

【付記】本稿は日本大学法学部個人研究費，日本学術振興会科学研究費補助金（課題番号：24K00126）に基づく成果を含むものである。